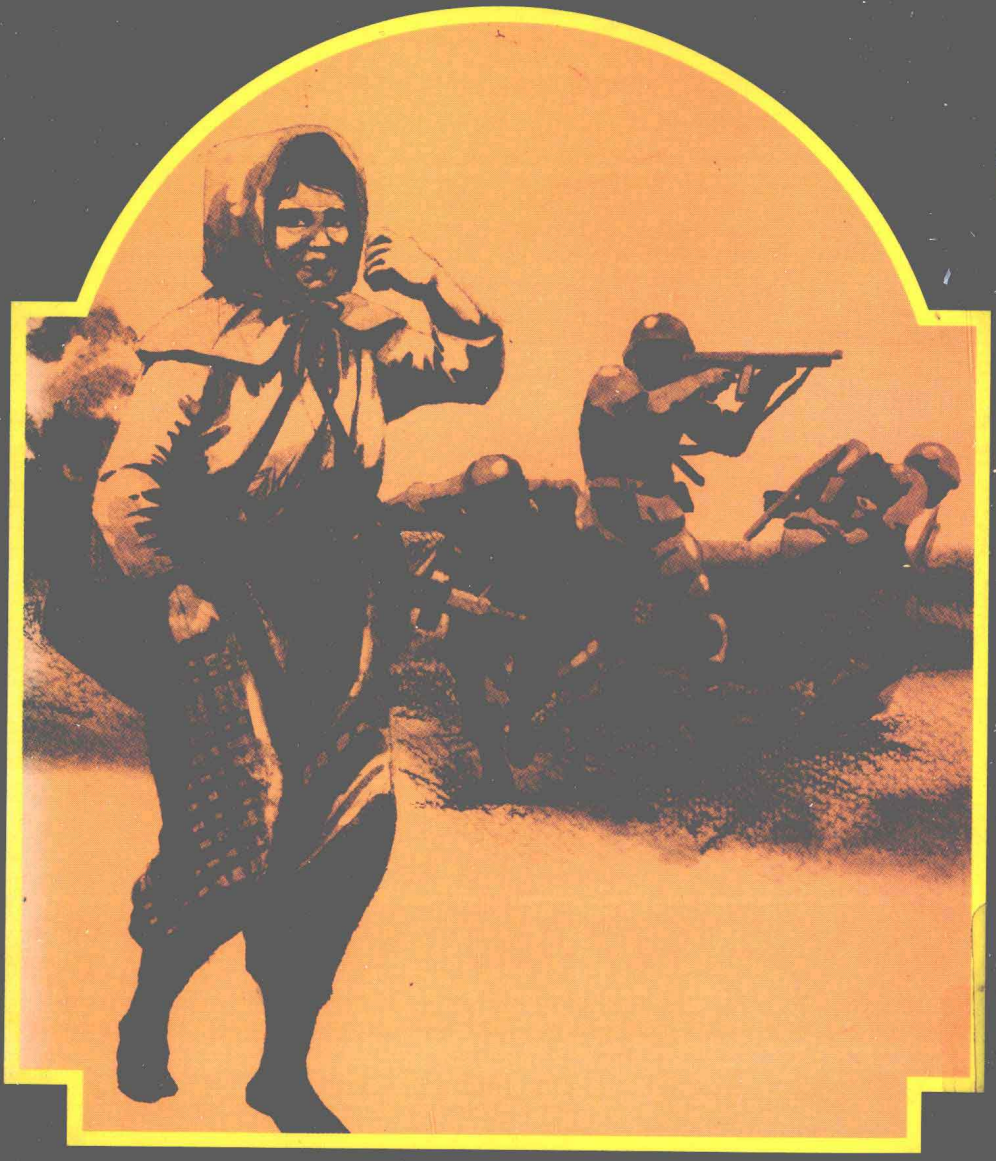
プリンセス・リリィ

A Princess Lily of the Ryukyus

ジョー・ノブコ・マーチン



A Princess Lily of the Ryukyus

ジョー・ノブコ・マーチン

沖縄島を南上空からうかがうと、まるでハブが三角頭をもたげ毒牙をむき出してこちらに向かってくるようだ。奇しくも摩文仁はその牙のところに位置している。

私の子供たちに

私の作品に大賞を与えてくださったミシガン大学のホップウッド授賞委員会に感謝の意を捧げます。とりわけ前委員長のロバート・F・ホウ名誉教授（Robert F. Haugh）の批評と指導は、作品の推敲にとても助けになりました。感謝に堪えません。

また、ミシガン大学の「女性のための生涯教育」（Continuing Education for Women）に携っているジーン・W・キャンベル夫人（Jean W. Campbell）およびスラブ語科のホレース・W・デュウイ教授（Horace W. Dewey）には精神的にも実務的にもご助力いただきありがたく思っています。

さらに、校正に計りしれないほどの時間を費やしてくださったオレゴン州セーラムのマーガレット・リングナルダ夫人（Margaret Ringnalda）およびマックス・アースキン氏（Max Erskine）にも深く感謝いたします。

最後に、いつも励まし続けてくれた私の子供たち――ジェラルド（Gerald）、ロバート（Robert）、スーザン（Susan）にもこの誌上をかりてお礼を申し述べます。みなさん、ありがとうございました。

ジョー・ノブコ・マーチン

序（英語版序）

マーチンさんは彼女の生まれ故郷である沖縄において一九四五年またはそれ以前に起こったことを書いています。沖縄は美しい島です。人々は明るく優しいが、そこはまた悲劇の島でもあります。歴史的に言えば、悲劇は一九四五年に始まったわけではありませんが、この島がアメリカによって侵略され占領された一九四五年の春と夏に悲劇は最高潮に達したのです。その年の出来事は後世の記憶にとどめておくべきです。そのじつ、沖縄ではもちろん、多少の差はあれ、本土においても沖縄の悲劇ははっきりと記憶されています。

犠牲者の中でも特に記憶されているのが〝ひめゆり隊の少女たち〟のことです。彼女たちは日本政府によって徴集され、多くの生徒が、自決によるか、または弾に当たるなどして命を失ってしまいました。いま、ひめゆりの塔は一種の聖堂になっています。

マーチンさんはそのひめゆり隊の一人だったのです。そして、このお話は彼女自身または彼女たちの物語なのです。彼女は、優美に、もの静かに、なおかつ感傷的にならずに話を進めています。さらに、少女時代のエピソードを回想として物語の間に挿入するという見事な方法を採用しています。この作品は、憎悪を表に出さず、控え目な表現によって、読む人の心を揺り動かします。広島について書かれた素晴らしい小説である、井伏鱒二の『黒い雨』を思い出させます。

我々は、この悲劇を侵略者の側の国の人々にも記憶にとどめてほしいと願っております。この尊重すべき本の発行によって、この願いがかなえられることを祈っています。

エドワード・サイデンスティッカー

はじめに

沖縄は、日本と台湾の間に点在する琉球列島の中で最も大きい島です。南北六五マイル、東西八マイルの小さな島で、小さな地図では見えるか見えないかのほんの小さな点でしか示されていません。第二次世界大戦以前は、ほとんどのアメリカ人が沖縄の名前すら聞いたことがなかったでしょう。空から見ると、沖に漂う縄のようです。〝沖の縄〟とは実にうまく名付けたものです。

私たち沖縄人は、青々とした亜熱帯の故郷を強く愛しています。背の高いガジュマルが黒い大枝からもつれた気根をぶらさげ、また雄大なデイゴは燃えるように赤い花で真夏の空を飾ります。沖縄の子供たちはガジュマルやデイゴのまわりで遊びながら成長するのです。校庭や市中、また田舎の開墾地では、子供たちがこれらの木々の木蔭でかくれんぼや縄跳びをして遊んでいる姿が見られます。彼らの笑い声やおしゃべりが豆腐や大豆かす、アイスクリームを売り歩く物売り商人の呼び声と混じりあって聞こえてきます。あれほどの青い空と白い雲は沖縄以外ではなかなか見られません。島は珊瑚礁で囲まれており、海はとても美しく、紫・藍・緑など、多彩な色を呈します。波は泡立つように打ち寄せます。

那覇市の中で一番賑わう場所は港でした。子供のころ、私は那覇港へ行って、日本本土や台湾や南の島々から往来する船を眺めるのが大好きでした。日焼けで真っ黒になった裸の港湾荷役人が荷物の揚げ降ろしをしていたのを覚えています。また、堅苦しそうな黒い上着をぴっちりと身につけた裸足の車夫が上陸したお客を奪い合っていたのも思い出します。田舎では、ベージュ色に輝く砂糖きびの毛がそよ風に揺れ、刈入れを待っている光景が見られます。戦前の沖縄では、農家の裏庭での砂糖作りが普通に見られる光景でした。男の子たちは父親を手伝って、きびを引臼に入れ汁をしぼります。女の子たちは母親と一緒になって、しぼった汁を鉄の鍋に入れ黒いペースト状になるまで煮つ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

めるのです。付近では、上半身が裸の子供たちがハイビスカスの木立ちに見え隠れして遊んでいます。

忘れられない郷土の風習の一つに八月中旬の墓の前での饗宴があります。お盆の日には一家をあげて先祖の墓の前に集まり、飲んだり食べたりして、先祖の霊を迎えお祝いするのです。墓を取り囲むなだらかな丘の上に見られる身をよじらせた松の姿はとても優雅で、平和な光景の一部です。精巧に作られた灰色の亀の形をした石墓はいまは少なくなってしまいました。私が記憶している沖縄は、平穏で、太陽が地上いっぱいにふりそそぎ、とりわけ子供たちの笑い声がよく響きわたる平和な島でした。

沖縄は過去に、招かざる客の侵入を受けたことがあります。徳川幕府が開かれて間もなく、財政の危機に陥っていた薩摩の島津家久は幕府より琉球征討の許しを得て一六〇九年に沖縄に侵攻しました。首里城はいとも簡単に攻略され、尚寧王は城を出て和を請い、戦いはあっけなく終わりました。武器を倉にしまいこんで平和外交政策を押し出していた琉球にとって棒の先から火の出る武器の前ではいかんともできなかったのです。

この薩摩の琉球入りの時、琉球が島津氏の従属国であることを認めた起請文に連判を拒んで斬首された謝名親方について一つの伝説があります。彼は熱湯の煮えたぎる大釜の中に生きたまま投げ込まれようとした瞬間、釜の縁に立っている二人の死刑執行人の髻をつかみ、両の脇にかかえると、わめき声をあげる彼らを道連れに煮えたぎる釜の中に身を投げたというのです。真疑はともかく、少なくともこのプロットが母や近所の奥さんたちと那覇の芝居小屋で一緒に見たメロドラマ『国難』の中で展開される琉球の立ち場です。『国難』が上演されると、いつも劇場はいっぱいになり、謝名親方が釜の前に進み出て敵の死刑執行人の髻をつかみ共に死ぬクライマックスになると、観客はみな興奮してやんやの喝采をあげるのです。

それ以後の琉球は、薩摩の支配下にありながら、王が交替する時は中国からも冊封を受けるという日中両属関係にありました。そして、日本が明治を迎え廃藩置県が実施されると、琉球藩もまた一八七九年に沖縄県となるのです。

かくして、沖縄はいやもおうもなく次第に日本の侵略戦争の中に巻き込まれていったのです。

過去何百何千年ともいう間、沖縄の最も厄介な敵は自然でした。熱帯性低気圧、俗に言う台風はほとんど毎年のように沖縄を襲い、家屋や田畑を破壊してきました。台風は農家の作物を吹きとばすのです。飢饉ともなると、島民は蘇鉄などの毒を含む植物以外には何も食べるものがなくなることさえありました。

一九四五年に第二次世界大戦が沖縄を襲った時の私は十代の少女でした。どんな台風もその時に襲来した〝鉄の暴風〟には比すべくもありません。私たちの沖縄では、日本軍人と沖縄県民を合わせて二十万人以上の人々が命を落とし、米軍もまた一万人以上の戦死者を出しました。戦死者の中には私のクラスメイトや先生たちもいます。今日、沖縄を訪れる観光客は、まず〝ひめゆりの塔〟を訪れます。二つの大きな石碑には戦死したひめゆりの学徒や先生たちの名前が刻みこまれています。これらの石碑の前には生花が絶えることなく、また礼拝する人々のたく線香のけむりがいつも漂っています。

私がこの本を書いた目的は、決して戦争の統計学を思い出させるためではありません。とはいうものの、私自身は長い間戦争の思い出と共に生きてきました。いま、それを後輩の方々と分かちあわなければと思っています。小説という形式をとっていますが、私は私の記憶の中にあるものを、できるかぎり心に映じたままに正直に描いたつもりです。というのは、私自身が戦争体験者だからであり、二度とこういった愚挙を繰り返したくないからです。人間の愚かしさは、いつの世でも、知らず知らずのうちに同じことを繰り返してしまうということです。事実を隠蔽したままでは決して真実は後世に伝わらないでしょう。

ともあれ、沖縄戦では個人個人がそれぞれに異なった体験をしてきました。それゆえ、人それぞれに沖縄戦の印象は違って感じられたでしょう。この作品は少なくとも私自身の心の中で揺らめいている残像であることは確かであり、それは沖縄戦の一部でもあるわけです。

ジョー・ノブコ・マーチン

日本版に寄せて

この小説は、私がミシガン大学院に通っていた時に英語で書きおろした作品です。同大学の英文学を担当していたロバート・F・ホウ（Robert F. Haugh）教授の薦めもあって、ホップウッドに応募したところ、幸運なことに、一九七二年度の賞をいただきました。

一九四五年三月、私は沖縄師範学校女子部の本科二年に在籍し、あとは卒業式を待つばかりでした。ところが、三月二十四日に玉城村の港川方面で米軍の艦砲射撃が始まりました。私たち姫百合の学徒（沖縄師範学校女子部および沖縄県立第一高等女学校の生徒たち）は、学徒従軍看護要員として職員ともども二百九十七名がただちに南風原陸軍病院の勤務に赴きました。私は第二外科に勤務し、やがて沖縄最南端島尻半島の突端である喜屋武岬まで追い込まれ、精根尽き果てて米軍の捕虜になりました。戦闘は主として中部で行なわれ、首里の陥落したあとは、私たちはただ南へ南へと逃走するばかりでした。あの狭い地域で、しかも僅か三カ月の間に日米合わせて二十万人以上の戦死者を出しました。

沖縄戦では、ほとんど一方的な米軍の攻撃による〝鉄の暴風〟が吹き荒れ、沖縄県民は悲惨極まりない戦いを強いられました。第二次世界大戦において沖縄ほど戦禍を蒙ったところは世界中に類がないと思います。その結果、沖縄は〝血の島〟として歴史に名をとどめたのです。その沖縄戦において、私は正真正銘それを生き抜いてきた姫百合学徒の一人です。陸軍病院に勤務した全生徒の約三分の二が沖縄戦で命を落とし、私は多くの友や師を失いました。いまは映画で有名になっている第三外科の壕の悲劇、また断崖に追い込まれて消息を断った友人などがそれです。

それだからこそ私がこの小説を発表することに反対する友人もいました。場面設定が南風原陸軍病院という事実の

中で、しかも私が戦争の体験者であるだけに、いくら小説というスタイルをとっても、読む人はすべてを実話のように受け取ると心配するのです。そのじつ、日本文に翻訳した際、一部の人に読んでいただいたところ、「従軍の様子、病院での出来事、壕の中の状況、友達との人間関係など、事実にそってよく描写されているところがある」と指摘されました。そして、それだけに出版を見合わして欲しいとも申入れを受けました。

沖縄戦の体験は、厳粛なものであり、事実だけを後世に伝えたいという友人たちの気持は、私も同じ戦争体験者だけによくわかります。沖縄戦体験者は誰もがそのような使命感を少なからず持っており、事実を漫画にも映画にもして欲しくないと思うのは当然のことでしょう。ましてや恋愛小説など、もってのほかだと叱られました。私もそのとおりだと認めます。しかし、私は私なりの信念があって、この作品をどうしても世間に問いたいと考え、英語で書くことに心血を注いだのです。

現在、英語は万国共通語としての地位を占めていますし、それゆえ作品を世界各国の人々に読んでもらうにはもってこいの言葉だからです。外国人が英語で小説を書いて賞を受けた例としては『ロリータ』のノビコフやジョセフ・コンラッドがありますが、彼らの言語は英語と親類関係にあります。私は日本人であり、日本語を母国語とする者が英文学をものにするには並大抵の努力ではありませんでした。ともかく、私は本を書きたくて徹底的に英語を勉強したのです。

私は戦後まもなくアメリカに渡った戦争花嫁で、日本人のまったくいないところで生活してきました。そのおかげで英語の上達は早まったと思います。しかし、アメリカ人の中に入ったからといって、簡単に英語で小説が書けるわけではありません。むしろアメリカ人のほとんどが小説など書けないといって差し支えないでしょう。私の執念は相当なものだったのでしょう。当時、日本語ではとても沖縄戦のことを書く気になれなかったので、英語を学ぶよりほかに手立てがなかったのです。戦争花嫁という屈辱の状況が私を奮いたたせてもくれました。

最初、私はこの作品の一章ずつをそれぞれ短編として物してきました。ですから、その一編ずつはミシガン大学(University of Michigan)の『アメリカ文学の旅』(A Literary Journey through America)やウィラメット大学(Willamette University)の『ザ・ジェーソン』(The Jason)などに発表されています。私がこの作品を書き上げたのは主として三十七歳から三十九歳のころでした。

作品を応募する際、大学の先生と相談して「思い出の記」を書き加えました。これらの章は、私の幼いころの思い出が主になっています。これらを書き加えた理由は、第一に戦争と平和を対照的に扱うことによって、戦争の憂鬱(ゆううつ)から逃れるリリーフにしたのです。第二にアメリカ人に沖縄の風習などを知ってもらうつもりのエピソードとしました。第三に主人公を立体的にして読者の興味をつなぐ目的で構成したわけです。

受賞のあと、私は家事と三人の子供たちに時間を奪われ、執筆に時間をさくことはできなくなりました。子供たちは成長し、長男・次男に続いて、三番目の長女が私の手許から離れることになりました。娘に沖縄を見せてやったあと、私は米国に帰ってこの作品の手直しを始めました。

一九八三年、私は沖縄を訪れ、この作品を英語で一冊にするよう弟や妹たちと相談しました。もちろん、本土の出版社の人たちとも会いました。そんなある日、東京で新日本教育図書の藤田修司社長にお目にかかったのです。同氏は日本語に翻訳するよう要求してきました。私としては英語だけでよかったのですが、出版社の強い要請により、ついに日本語へ翻訳する運びとなりました。

私はこの作品において戦争を描写したかったのではありません。戦争の手記をしたためたものではなく、小説として、文学として取り組んだのです。戦争をバックグラウンドにして人間を描きたかったのです。ただ背景が戦争であるだけに、結局、人間が戦争という環境に投げ込まれた時、どんな振舞いをするかということに触れざるを得ませんでした。戦争はもとより道徳的なものではありませんし、そんなことはわかりきっていることですから戦争の悲劇を

強調したつもりはありません。できるだけ冷静に突き離して眺めたつもりです。それでも戦争の過酷な場面が連続するわけですから、読む人から言わせれば、プロパガンダにとれないこともないでしょう。私としてはそれでもいい。しかし、強いプロパガンダにはとられたくありません。私は人間を描いたのであって、戦争を書いたのではないのですから。

『プリンセス・リリイ』はフィクションですから登場人物は実在の人物ではありません。私自身がモデルの一人であり、空想の人物の一人です。私が小説家であることをもう一度強調しておきます。しかし、私もまた沖縄戦の体験者の一人として戦争を強く忌避します。それだからこそ、人間が戦争という極限状況に置かれた時、一体どんな行動をとるかをもっと正確に書きとめておきたい願望に襲われますが、この作品はそういう目的で書いたものではありません。ともあれ作品の判断は読者におまかせします。作品をどのようにとらえるかは読み手にしか権利がないわけですから……。

日本語に翻訳するに当たり、私の日本文が古くなっていたり、単語の選択が不適なためニュアンスが著しく違っていたり、英語的な感覚がむきだしになっていたりして、姫百合同窓生の皆さんにはいろいろなご指摘をいただきました。そのご意見をもとにしてところどころ日本文を書き直させていただきました。私が米国に滞在していることもあって、裏付け調査はすべて出版社にお願いし、約二年をかけて調査していただきました。そして三月初旬、藤田社長にオレゴンまで来ていただき最後の打合せをして、ようやく出版の運びに至りました。

コメントを寄せてくださったサイデンステッカー先生には感謝の念でいっぱいです。そのほか、日本版の出版にこぎつけるまでご協力いただいた関係諸氏に対して心からお礼を申し上げます。

一九八五年六月六日

ジョー・ノブコ・マーチン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

私の子供たちに 1
序 2
はじめに 3
日本版に寄せて 6
著者紹介 12

●第Ⅰ部
第一章 二十四時間の監視 15
第二章 連日連夜の提灯行列 21
第三章 竹槍と防空訓練 27
第四章 ああ！対馬丸（つしま） 32
第五章 十・十空襲 36
第六章 母への追憶（思い出の記） 44
第七章 青い月夜の暗い家 54
第八章 チルの旅立ち（思い出の記） 59

●第Ⅱ部
第一章 壕の中 75
第二章 夜ごとの訪れ 83
第三章 腕の太い看護婦 90
第四章 苦い薬（思い出の記） 99
第五章 中谷軍曹との出会い 112
第六章 月見（思い出の記） 121
第七章 北岸少尉の威光 130
第八章 南風原一の嫌われ者 139
第九章 藤村婦長殿 147
第十章 ラッキー・ストライキ 154
第十一章 渡辺軍曹との再会 163
第十二章 国頭の宴（うたげ）（思い出の記） 167
第十三章 中谷への想い 186
第十四章 十五銭の保護者会費（思い出の記） 193

第十五章　ほうきと砂糖きび　205
第十六章　壕内の岩風呂　213
第十七章　堀川軍曹の頼み　218
第十八章　がんばれ、信子（思い出の記）　226

●第Ⅲ部
第一章　糸数への羨望　237
第二章　頭を失った首里　247
第三章　離別　251
第四章　静かなる午後の兵隊たち　257
第五章　黒砂糖と地下足袋　261
第六章　重い荷を担いで　265
第七章　石の壕　274
第八章　三日目の旅　281
第九章　洗骨とユタ（思い出の記）　287

●第Ⅳ部
第一章　村長の家　303
第二章　渡辺軍曹と山羊汁　308
第三章　一切れのガーゼ　313
第四章　田中少尉が帰ってきた　317
第五章　山羊小屋の歌い手　320
第六章　中谷との再会　325
第七章　中谷、糸洲へ移る　329
第八章　恋敵　337
第九章　午後の散策　344
第十章　夜の米　350
第十一章　地下へ導くトンネル　356
第十二章　日本刀の霊力　363

●第Ⅴ部
第一章　熱気と人声　375

第二章　アダンと珊瑚礁の島　383
第三章　失敗した斬込み　389
第四章　赤鬼と緑色の男たち　401
第五章　お菓子との再会　411
第六章　偉大なる将軍たち　417
第七章　捕虜収容所へ向かって　425
第八章　落ちた偶像　431
第九章　美人コンテスト　441

●さし絵
真喜志　勉
杉野　雅子

著者近影：オレゴン州セーラムにて

●著者紹介

ジョー・ノブコ・マーチン（旧姓、与那城信子）は沖縄で生まれた。第二次世界大戦後、戦争花嫁としてアメリカに渡り、オースチンのテキサス大学およびミシガン大学で学んだ。ミシガン大学ではロシア語、ロシア文学のB．A．と日本語、日本文学のM．A．およびph D．の３つの学位を取得している。ミシガン大学に通っている時に書いた彼女の小説は1972年のHopwood Creative Writing Contest でMajor Prize を受賞した。彼女の小説や論文はこれまで雑誌に発表されてきた。２男１女の母親。ミシガン州在住。

Part 1

第一章　二十四時間の監視

私は沖縄南部の糸満という小さな漁村で生まれた。五歳の時、私の家族は糸満を離れて、中心地の那覇市に移り住んだ。

歳月がたち、十五歳を迎えると、私は那覇市からあまり遠くない姫百合女学校(沖縄県立第一高等女学校)に通うようになった。

女学校の校長先生は尚(しょう)というお方で、琉球王府時代の王家直系の子孫であった。王族の血筋を受け継いでいるせいか、尚先生には少し近寄りがたいところがあったし、その立ち居振舞いはとても優雅であった。姫百合の生徒たちに対しても、常々誇り高い理想を掲げるよう指導していた。

紺色の制服の胸にきらめくダイヤ型のブローチが、姫百合女学校の精神と目的とを表わしていた。第一高女のブローチには〝白百合〟、師範部のそれには〝乙姫〟が浮彫りされていた。それは、いままさに咲き始めんとする白百合と乙姫の姿を象徴していた。私たちはまだ学途半ばのうら若き女性であったが、胸のシンボルには〝姫百合〟たちが卒業して世に出たあと、満開して咲き誇るという意味がこめられていた。ちなみに、姫百合は英語で〝プリンセス・リリイ〟と言う。

「清く、正しく、美しく」というのが、学校のモットーであった。ダイヤの形は、私たちの徳が世界に向かってさんぜんと輝くことを願ってデザインされたものであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com